

4 と畜牛の腸管出血性大腸菌 O157 保有状況

○松本 圭(豊橋市食肉衛生検査所)
吉川雅己(")
塚田真樹(")
瀬尾幸嗣(")

【はじめに】

食肉由来の食中毒原因菌として、腸管出血性大腸菌 O157(以下、EHEC O157)が挙げられるが、EHEC O157 による食中毒の発生の多くは、牛の腸内容物や外皮に付着した糞便から食肉への二次汚染が原因と言われている。そこで、EHEC O157 保有牛(農家)を把握し、EHEC O157 の二次汚染防止対策の基礎データとするために、と畜牛の EHEC O157 保有状況を調査したのでその概要を報告する。

【材料及び方法】

平成 18 年 2 月から 6 月に管内と畜場に搬入された牛 4,408 頭のうち、健康肥育牛 96 頭(黒毛和種 24 頭、交雑種 67 頭、ホルスタイン種 5 頭)の直腸内容物を検体とした。検査牛の選定は原則各農家 1 頭としたが、保有牛がみられた農家については、可能な限り検査数を増やした。検査頭数の月別内訳は 2 月 16 頭、3・4・5 月各 24 頭、6 月 8 頭であった。検査方法は厚生省通知(平成 9 年 7 月 4 日付け衛食第 207 号・衛乳第 199 号)に準じた。なお、検体量は 1g とし、増菌培地のノボオキシム加 mEC プロスを 20ml とした。また、免疫磁気ビーズ法で集菌を行い、酵素基質培地にクロモアガー O157 を用い、PCR でベロ毒素遺伝子を確認した。

【まとめ】

96 頭(54 農家)の EHEC O157 保有調査の結果、3 頭(3.1%)から EHEC O157 が分離された。陽性となった 3 頭(3 農家)の検査時期は 2 頭が 2 月、1 頭が 6 月で、それぞれ交雑種 27 ヶ月齢の牝、黒毛和種 29 ヶ月齢の牝、黒毛和種 29 ヶ月齢の去勢であった。EHEC O157 については農家単位で汚染の拡大が起きているとの報告がある。しかし、2 月に EHEC O157 を検出した 2 農家について、保有牛の他に 5 頭と 4 頭の検査を行ったところ、すべて陰性であった。

今回の調査結果を踏まえ、剥皮工程での汚染防止、内臓摘出時の腸管破損による汚染の防止等、保有牛の存在を前提とした衛生的な処理を徹底し、引き続き食肉の安全確保に努めたい。